壷中雑記（18）― 歴史文化博物館から ―　人と土と鋤

愛荘町立歴史文化博物館では2000点以上の民俗資料を収蔵しています。中には似たような収蔵品もあり、農具の「鋤」だけでも17点収蔵しています。しかし、全く同じ鋤をいくつも収蔵しているというわけではなく、それぞれの鋤の細かな違いを見ていくと愛荘町の農業の歴史と先人の知恵が分かることから収蔵しています。

江州鋤

滋賀県の鋤について書かれた史料として、文政５年（1822）に大蔵永常が記した『農具便利論』が挙げられます。この本は永常が諸国を旅した際に各地方で発見した便利な農具を記したもので、多くの農民が生産効率を上げるためにこの本を参考にしました。

『農具便利論』の中で永常は「江州鋤」という鋤を紹介しており「江州鋤は近江国栗太郡（現在の草津市・栗東市）で使用されている鋤で、少し曲がっており、畦の土を掬うには便利である」と評価しています。

当館所蔵品にも江州鋤がありますが、それぞれを見比べると大きさや角度が異なります。この違いはなぜ生まれるのでしょうか。

その答えは愛荘町の地質にあります。愛荘町は地域によって地質が大きく異なるといわれ、愛知川地区では国道８号より南東は土地が乾燥しており、一方で北西側は湿潤な土地が多いとされます。

また、秦荘地域では粘土質な土地が多いようです。乾燥した土地では牛による耕うんを行えるので、鋤は牛の入れない狭い場所を耕すための小さいものが好まれます。

▲江州鋤（左）と坂東式大鋤（右）

一方で湿潤・粘土質な土地では牛耕を行うことができず、全て手作業で耕すため、大きな鋤が好まれます。

また、地質の違いは鋤の重さや木材の強度、部品の構造などにも影響し、さらに違いが生まれます。

坂東鋤

湿潤な土地や粘土質な農地での作業は「地球の皮をめくる」とも例えられる重労働であったといい、人にも道具にも大きな負担であったようです。

明治３年（1870）に愛知郡南安孫子村（現・愛荘町安孫子）に生まれた坂東米次郎はこうした過酷な作業を軽減するために「坂東鋤」を考案しました。

坂東鋤は全体を鉄製とし、刃の部分に隙間を設けて土が付着しづらいように工夫がされています。

また、柄の部分を短くすることで軽量化も図っています。これらの改良により、固い土や植物の根ごと断ち切って深耕することができ、過酷な作業が軽減されたといいます。

坂東米次郎はこの坂東鋤と普通の鋤を携えて各地で比較・実演販売を行っていたといわれます。このためか、坂東式大鋤は愛荘町に限らず、県内各地に残っています。

◇

このような「民具」と呼ばれる道具類は身近にあったものであるからこそ、伝承や古文書には残らない昔の人々の営みを読み取ることができます。このため博物館では数多くの民具を収蔵し、日々研究しています。

歴史文化博物館 学芸員
西連寺　匠

【参考文献】
愛知川町史編集委員会編・刊『近江　愛知川町の歴史　第三巻』2008 年
秦荘町史編集委員会編・刊『秦荘の歴史　第四巻』2009 年
滋賀県立琵琶湖博物館編・刊『民具を科学する～明治の絵図と現代の実測図から見た近江の民具～』2012 年

3月は自殺対策強化月間です

あなたの「自殺」に対するイメージはいかがでしょうか？

自殺は単一の要因または単一の出来事から生じた結果ではなく、人を自殺へ追い込む要因は多様かつ複雑である場合が多いことが明らかになっています。世界保健機関（WHO）が各国の様々な研究を基にまとめ、2017年に発表した「自殺対策を推進するためにメディア関係者に知ってもらいたい基礎知識」には「自殺に関する迷信（myth）と事実（fact）」が記載されていますのでご紹介します。

自殺に関する迷信（myth）と事実（fact）

迷信？ 自殺について語ることは良くない考えであり、自殺を助長するものと捉えられてしまう可能性がある。

事実！ **世間に広く存在する自殺への偏見を考慮すると、自殺を考えている人の多くは誰にそのことを話せばいいのかわかりません。自殺について語り合うことは、自殺関連行動の助長ではなく、その人に自殺以外の選択肢や決心を考え直す時間を与えることができ、結果として、自殺を防ぐことにつながります。**

迷信？ 自殺について語る人は自殺するつもりはない。

事実！ **自殺について語る人は、外側に向けて助けや支援を求めているのかもしれません。自殺を考えているきわめて多くの人が、不安、うつ、絶望を感じており、自殺の他に選択肢がないと考えている可能性があります。**

迷信？ 自殺を考えている人は死ぬ決心をしている。

事実！ **反対に、自殺を考えている人は「生きたい」気持ちと「死にたい」気持ちの間で揺れ動いていることが多いです。例えば、農薬を衝動的に飲んでしまい、生きたいと思っても数日後に亡くなることがあるなど正しいタイミングで情緒的支援にアクセスすることができれば、自殺を防ぐことができます。**

迷信？ 自殺の多くは何の前兆もなしに突然起きる。

事実！ **自殺のほとんどの事例で自殺前に、言葉か行動に周囲の人が気づくような兆候(warning sign)を示していました。もちろん兆候なしに起きる自殺もあります。周囲の人が気づくような兆候とはどのようなものかを理解し、それに注意を払うことが大切です。**

迷信？ 一度自殺を考えた人は、ずっと自殺したいと思い続ける。

事実！ **自殺リスクが高まることは一時的なものであり、その時の状況に依存することが多いです。自殺念慮が繰り返し起きることはあるかもしれませんが、長く継続するものではなく、過去に自殺念慮や自殺未遂があった人でも、その後の人生を長く生きることができます。**

◆引用文献：自殺対策を推進するためにメディア関係者に知ってもらいたい基礎知識2017年最新版　付録4
◆出　　典：厚生労働省　ホームページ

問 健康推進課（愛知川庁舎）　☎0749―42―4887